心理学研究 2016 年　第 86 巻 第 6 号　pp. 584−588

研究報告
Research Report

16 世紀に渡来した宣教師は日本人を“集団主義的”と評したか？

髙野 陽太郎[1]　伊藤 言　東京大学

Did a 16th century Christian missionary observe that the Japanese were collectivists?

Yohtaro Takano and Gen Ito（*University of Tokyo*）

Volpi (2004) pointed out that Alessandro Valignano, a 16th century Christian missionary, had considered the Japanese extreme collectivists. According to Volpi, his remark was based on Valignano's reports (1583, 1592) edited by Alvares-Taladriz (1954). However, it is highly questionable whether Volpi examined these texts directly because the information about them provided by Volpi involved many serious errors. A thorough inspection of Valignano's translated reports found no mention of Japanese collectivism. On the contrary, he had actually reported exceedingly individualistic behaviors of Japanese warriors. Such behaviors are consistent with what is widely known about the 16th century Civil Wars in Japan. It has thus turned out that no reliable evidence is present for the alleged observation by Valignano.

Key words: collectivism, Japan, 16th century, Valignano, Volpi.

The Japanese Journal of Psychology
2016, Vol. 86, No. 6, pp. 584−588
J-STAGE Advanced published date: November 10, 2015, doi.org/10.4992/jjpsy.86.14331

本論文の目的は，“16 世紀に来日したキリスト教の宣教師が日本人を‘集団主義的’と評した”という主旨の記述（Volpi, 2004）について，その真偽を検証することである。

“日本人論”（別称“日本文化論”）においては，数多くの論者が“日本人は集団主義的，欧米人は個人主義的”であると主張してきた（e.g., Benedict, 1946; Gibney, 1975; 中根，1967; Vogel, 1979）。“集団主義”は，通常，“個人の利益を犠牲にしてでも集団の利益を図るという思考・行動様式”を指し，“個人主義”は，その逆の思考・行動様式を指す（詳しくは Takano & Osaka（1999）を参照されたい）。

近年，Markus & Kitayama（1991）は，この日本人論の通説を下敷きにした自己観理論（self-construal theory）を提唱し，西欧に起源を持つ文化に属する人々は“相互独立的自己観 independent self-construal”を持っているために個人主義的に行動し，それ以外の文化に属する人々は“相互依存的自己観 interdependent self-construal”を持っているために集団主義的に行動すると主張した。日本においては，近年，心理学的な比較文化研究の多くが自己観理論の枠組みの中で行われてきたことを考えると，“日本人 = 集団主義”説の妥当性は，心理学にとっても重要な意味を持っていると言えよう。

日本人論のこの通説に関しては，“実証的な比較研究という裏づけを欠いている”という主旨の批判がなされてきた（Mouer & Sugimoto, 1986; 杉本・マオア，1982）。高野・纓坂（1997）と Takano & Osaka（1999）は，実証的な観点からこの通説の妥当性を検証するために，日本人を“世界で最も個人主義的”であると言われてきた（Dore, 1991）米国人と比較した心理学的な実証的研究を総覧した。その結果，11 件の質問紙

Correspondence concerning this article should be sent to: Yohtaro Takano, Department of Psychology, Graduate School of Humanities and Sociology, Hongo, Bunkyo-Ku, Tokyo 113-0033, Japan（e-mail: yohtaro.takano@gmail.com）

[1] Valignano の報告書について，翻訳者の紹介をお願いしたところ，邦訳の存在をご教示くださった東京大学人文社会系研究科南欧語南欧文学研究室の長神 悟教授に深甚なる謝意を表したい。長神教授のお力添えがなければ，本論文の調査は明確な結論に至らないままで終わっていた可能性が高い。問い合わせにお答えいただいた Vittorio Volpi 氏にも御礼を申し上げる。Volpi 氏の著書に注意を喚起してくださった法政大学の小池 和男名誉教授にも謝意を表したい。

研究と 4 件の行動研究（同調行動，協力行動に関する実験的研究）のうち，通説と一致する結果を報告している研究は 1 件のみであり，残る 14 件の研究は通説を支持していないことを見出した。

その後の研究をも含めて再検討を行った高野（2008）は，19 件の実証的研究のうち，前回と同じ 1 件の研究を除いて，残る 18 件の研究が通説を支持していなかったことから，“通説は実証的研究によって支持されていない”という結論を確認した。続いて，高野（2008）は，従来“日本人の集団主義”の証左とされてきた日本の経済システム，学校でのいじめ，日本語の特性についても，近年の実証的研究を検討し，いずれも通説を支持していないことを見出した。

更に，高野（2008）は通説の成立過程を調べ，通説の源泉は，欧米の（特に米国の）日本観察者達による短期間の皮相な観察にすぎないことを明らかにした。近代西欧に誕生した個人主義イデオロギーを背景に，そうした日本観察者達は，“個人主義”の対極にあたる“集団主義”のイメージを“日本”という異文化に投影し，日本についての体験的な知識を持たない欧米人がそれを受け入れたと考えられる。そうした意味では，通説は一種の“オリエンタリズム”（Said, 1978）と考えることができる。

これに対して，Heine, Lehman, Peng, & Greenholtz（2002）は，実証的研究が通説を支持していないという Takano & Osaka（1999）の主張を次の 3 点で批判した。(a) 通説と一致しないという質問紙研究の結果は，“準拠集団効果”による事実誤認（artifact）である（“準拠集団効果”とは，“準拠集団が異なる場合には，質問紙への回答に集団間の差異が反映されない”という可能性である）。(b) 同一国内では，質問紙調査において，下位文化間に通説と一致した差異が認められたが，これは同一国内では準拠集団効果が生じないためである。(c) 行動研究の結果が通説と一致しなかったのは，実験参加者が内集団の成員ではなかったためである。

この批判に，Takano & Sogon（2008），Takano（2013）は，次のように回答した。(a) 原理的に準拠集団効果が起こり得ない場面想定法を用いた質問紙研究（Triandis, Bontempo, Villareal, Asai, & Lucca, 1988）においても，通説とは一致しない結果が得られている。(b) Heine et al.（2002）が観察した同一国内における下位文化間の差異は，準拠集団効果によって説明することができる。(c) 内集団の成員を実験参加者とした同調行動の実験を行ったところ，同調の程度は，外集団の成員を実験参加者とした日本の研究とも，米国の研究とも変わらなかった。また，協力行動に関しても，内集団と外集団との間に差異は認められなかった（真島・山岸・Macy, 2004）。則ち，実証的研究の結果は，“通説を支持していない”という点で一貫しており，Heine et al.（2002）の批判は，この事実を覆すものではない。

巡察師ヴァリニャーノ

“日本人 = 集団主義”説は本質主義（essentialism）の立場をとっており，集団主義が日本文化の不変の本質であると想定している（e.g., 石田，1969; 中根，1964）。例えば，中根（1964, p. 76）は，“日本人の集団主義”について，“これは日本人の血の中に脈々と流れており，それが一定の条件におかれた場合，極端に出たり，出なかったりするだけで，根強く潜在していることを知らなければならない”と書いている。こうした主張が正しいとすれば，日本人は，時代を問わず，常に集団主義的に行動してきた筈である。

高野（2008）は，歴史学的な資料に基づいて，欧米化する以前，日本人がどのような行動傾向を持っていたかを検討し，日本人は，歴史的・社会的な状況に応じて，集団主義的，個人主義的，いずれの行動をとる場合もあり，一貫して欧米人より集団主義的であったとは言えないということを明らかにした。この検討の中で，16 世紀に日本を訪れたポルトガルの宣教師ルイス・フロイス（Luís Fróis）が，著作“日本史”（Fróis, 1549−1593 松田・川崎訳 1977−1980）において，日本人を“集団主義的”とは評していないことを指摘した。

しかしながら，イタリア人の実業家・著述家ヴォルピの著書（Volpi, 2004 原田訳 2008）においては，“16 世紀の宣教師が日本人を‘集団主義的’と評した”という趣旨の指摘がなされている。この著書の主題になっているヴァリニャーノ（Alessandro または Alejandro Valignano）は，やはり 16 世紀に日本を訪れたイタリア人の宣教師で，東洋におけるイエズス会の布教活動を視察する“巡察師”という役割を担っていた。

Volpi によれば，Valignano は以下のような趣旨の記述を遺しているという。“日本に到着したとき，ヴァリニャーノは，――宇宙の中心を個人に置くラテン文化とは逆に――日本人が顕著な集団的性格を持っていることにすぐに気づいている。それは，強いグループ意識，個人の全体への服従心であり，それが極度の順応主義をもたらしている。神道も仏教も個人の人格を，消し去ることはなくとも押しつぶして，集団的メンタリティーや集団順応主義を称揚した”（Volpi, 2004 原田訳 2008, p. 59）。

また，Volpi は次のようにも書いている。“彼の戦略は，日本文化の基本を研究し，この住民が縦構造を持つ集団的，順応主義的社会を形成しているとの考察から成熟していった。それは，内容より形式を重んずる文化（ルース・ベネディクトが定義した‘恥の文化’）であった”（Volpi, 2004 原田訳 2008, p. 8）。

こうした Volpi の記述は，日本人論における通説の

妥当性を評価しようとするとき，極めて重要な意味を持ってくる。もし 16 世紀の日本人が実際に集団主義的であったとすれば，“集団主義”が日本文化に本質的な不変の特性であるという主張を裏づける有力な証拠になるからである。

文献調査

上に引用した Volpi の記述は，原典からの引用ではなく，Volpi 自身の記述であり，Volpi はその記述の典拠を記載していない。そこでまず，原典のどのような文言がその記述のもとになっているのかを確認するために，記述の典拠とそれを記している言語を Volpi に問い合わせた。回答の要点は以下の通りであった（Volpi, 私信[2]）。

（a）典拠は，“Sumario de las cosas de Japon,”Tomo I, pp. 5−24 と同第 15 章 pp. 97−101。（b）および，“Adiciones del Sumario de Japon”Tomo II, pp. 350−375。（c）いずれも上智大学図書館のキリシタン文庫に収蔵されている。（d）これらの資料は，一部ポルトガル語，一部ラテン語で記されている。その理由について，Volpi（私信[3]）は，“ポルトガルではポルトガル語が必要であり，ローマではラテン語が必要だったため”と説明している。

その後の調査により，松田（1973）が次のような事情を記していることが判明した。（a）の“Sumario de las cosas de Japon”（以下“日本諸事要録”とする）は，最初の日本滞在（1579−1582）の後，Valignano がローマのイエズス会総長に提出した報告書（Valingano, 1583）であり，（b）の“Adiciones del Sumario de Japon”（以下“日本諸事要録補遺”とする）は，2 回目の日本滞在（1590−1592）の後に提出した報告書（Valignano, 1592）である。いずれも，公刊はされていないが，複数の写本が遺されている。Volpi が参照したという上智大学図書館所蔵の資料は，大阪外国語大学の Alvarez-Taladriz が複数の写本に基づいて作成した校閲版（Alvarez-Taladriz, 1954）である。

この校閲版と照合した結果，Volpi から寄せられた上記の回答は，幾つもの点で事実と相違していることが明らかになった。（a）最も顕著な相違点は，報告書を記述している言語である。Volpi によれば，“一部ポルトガル語，一部ラテン語”ということであったが，実際には，校閲版（Alvarez-Taladriz, 1954）はスペイン語で記されていた。松田（1973）によれば，もとになった写本もスペイン語で記されているという。（b）Volpi は，典拠の 1 つとして“日本諸事要録”の“第 15 章 pp. 97−101”を挙げているが，第 15 章は pp. 188−193 であり，Volpi が挙げた pp. 97−101 は含まれていない。（c）Volpi は，もう 1 つの典拠として，“日本諸事要録補遺”の Tomo II（第 2 部）pp. 350−375 を挙げているが，上智大学図書館に所蔵されている“日本諸事要録補遺”の Tomo II は pp. 386−734 であり，Volpi が挙げた pp. 350−375 は含まれていない。この点について問い合わせたところ，“10 年前の自分の古いノートに記されていることなので，これ以上のことは言えない”という趣旨の回答であった（Volpi, 私信[4]）。

則ち，Volpi の回答は，その大部分が事実と相違していたのである。このことは，先に引用した Volpi の記述が Alvarez-Taladriz（1954）の原典に依拠していることを強く疑わせるものである。殊に，言語の違いからは，“Volpi は原典に直接あたっていないのではないか”という疑念が生ずる。母語とは異なる言語で記された文献を調べる場合，それがどの言語なのかは，現実問題として極めて重要な事柄であり，その言語を取り違えるということは，まず考えられないからである。

このような事情で，先に引用した Volpi（2004）の記述の典拠を Alvarez-Taladriz（1954）の中で特定することは不可能であった。しかし，校閲版の“日本諸事要録”には，邦訳の存在することが判明した。その邦訳は“日本巡察記”（松田・佐久間編訳，1965; 松田他訳，1973）に収録されており，“日本諸事要録補遺”の方も，ポルトガルのアジュダ（Ajuda）宮殿の図書館に所蔵されている写本から日本語に翻訳されている（松田他訳，1973）。

これらの邦訳を精査したところ，先に引用した Volpi（2004）の記述に対応するような文言は全く存在しないことが明らかになった。集団主義・個人主義に関連のある記述は散見されたものの，それらはいずれも，“集団主義／個人主義”の区別をあてはめるなら，通説とは逆に，“日本人の個人主義”を指摘するものばかりであった。

次の記述がその一例である。“この国民の第二の悪い点は，その主君に対して，ほとんど忠誠を欠いていることである。主君の敵方と結託して，都合の良い機会に主君に対し反逆し，自らが主君となる。反転して再びその味方となるかと思うと，更にまた新たな状況に応じて謀叛するという始末であるが，これによって彼等は名誉を失いはしない。事情かくのごとくであるから，自領に安堵して居れる者は皆無であるか，或いはごく僅かであり，我等が今見るように激しい変転と戦乱が続いているのである。したがって，血族や味方同志の間で，数多の殺戮と裏切行為が繰り返される。そうしなければ，領主は自分の希望が達成できないからである”（Valingano, 1583 松田・佐久間編訳 1965, p.

[2] 2012 年 1 月 2 日，1 月 3 日。回答の詳細を記すのは，Volpi（2004）の記述の信頼性を評価する上で，それが重要な意味を持ってくるからである。

[3] 2012 年 1 月 4 日。

[4] 2012 年 1 月 11 日。

190）

Valignano が訪れたのは戦国時代の日本であった。上の記述は，戦国時代について広く知られている歴史的事実とよく一致している。また，集団主義・個人主義の観点から 16 世紀の日欧を比較した Schooler（1990）は，“日本人は，同時代の西欧人と同程度に個人主義的であった”という主旨の結論を引き出しているが，この結論とも一致する。

考　　察

西欧において個人主義イデオロギーが成立したのは，フランス革命，産業革命を経て近代市民社会が成立してからのことであり，“個人主義”という用語が初めて文献に登場したのは 1820 年のことだと言われている（Lukes, 1973）。従って，16 世紀の日本に滞在したイエズス会士が，個人主義イデオロギーの裏返しである“集団主義”の概念を日本人に適用しなかったとしても，別に異とするにはあたらないであろう。

では，先に引用した“Valignano が日本人を‘集団主義的’と評した”という趣旨の記述（Volpi, 2004）は，何処に由来しているのであろうか？

Volpi（2004）の冒頭には，“親友のフォスコ・マライーニ”から Valignano の本を贈られ，そこには“国民性は変わらないものですね”というマライーニの献辞が書き込まれていたと記されている（原田訳 2008, p. 1）。マライーニ（Maraini）は人類学者であり，Volpi と同じイタリア人である。“日本人 = 集団主義”説は，米国の人類学者 Benedict の著書“菊と刀”（1946）が契機になって広まったと言われているが，Maraini は日本についての著書（Maraini, 1957）において，Benedict（1946）を引用した上で，各所で“日本人は集団主義だ”という主張を繰り返している。例えば，“ひとりの日本人は個人ではなく，細かく織り上げられた社会のなかのひとつの織目にすぎない”（Maraini, 1957 岡田監訳 2009, p. 152），“しかし，日本社会において個人とは何なのだろう？　ほとんどの場合，個人は存在しないと言える”（Maraini, 1957 岡田監訳 2009, p. 459）といった主張である。

先に引用した Volpi（2004）の記述（原田訳 2008, p. 8）でも Benedict への言及がなされている。また，そこに見られる“縦構造”という用語は，中根（1967）の著書“タテ社会の人間関係”の影響を窺わせる。

こうしてみると，Volpi（2004）が記した Valignano の見解は，Volpi 自身の見解なのではないかという可能性が浮上してくる。個人主義イデオロギーを知る現代の西欧人である Volpi が，Benedict（1946）や中根（1967）などを通じて“日本人 = 集団主義”説を受け容れ，“国民性は変わらない”という信念を抱く Maraini の影響を受けて，“日本人は集団主義的だ”という自らの見解を 16 世紀の Valignano に仮託して述べた，という可能性である。

別の可能性も考えられる。Volpi（2004）は，謝辞の中で，“ロザリオ・マニセーラ――日本研究の碩学――”について，“日本語をはじめ多くの言語で一次資料を読み解くその正確さ”や“資料解読時の手助け”に感謝を捧げている。Valignano に自らの見解を仮託したのはこの人物であったのかもしれない。

いずれも推測の域を出ないが，以上の議論の核心は，Volpi（2004）が“Valignano は日本人を‘集団主義的’と評した”という趣旨の記述をしているということそれ自体は，この記述に根拠があることを保証するものではなく，そうした記述がなされた理由については，他の解釈も可能だということである。Volpi がその記述の典拠として Valignano の“日本諸事要録”と“日本諸事要録補遺”を挙げている一方で，これらの文献には“日本人の集団主義”を指摘する記述が一切含まれていないということだけを見ても，Volpi の記述に事実の裏づけがないことは明白である。則ち，“16 世紀に西欧から渡来したキリスト教の宣教師が日本人を‘集団主義的’と評した”という主張には証拠が欠けているのである。事実の裏づけを持たない以上，Volpi の記述は，“集団主義は日本文化に本質的な不変の特性である”という主張の根拠にはなり得ない。

引 用 文 献

Alvarez-Taladriz, J. L. (1954). *Sumario de las cosas de Japón* (1583); *Adiciones del Sumario de Japón* (1592)/ *Alejandro Valignano; editados por José Luis Alvarez-Taladriz*. Tokyo: Sophia University.

Benedict, R. (1946). *The chrysanthemum and the sword: Patterns of Japanese culture*. Boston: Houghton Mifflin.
（ベネディクト，R. 長谷川 松治（訳）（1948）．菊と刀――日本文化の型――　社会思想社研究会出版部）

Dore, R. P. (1991). *Will the 21st century be the age of individualism?* Tokyo: Simul Press.
（ドーア，R. P. 加藤 幹雄（訳）（1991）．21 世紀は個人主義の時代か――西欧の系譜と日本――　サイマル出版会）

Fróis, L. (1549−1593). *Historia de Iapam*.
（フロイス，L. 松田 毅一・川崎 桃太（訳）（1977−1980）．日本史　中央公論社）

Gibney, F. (1975). *Japan: The fragile superpower*. New York: W. W. Norton.
（ギブニー，F. 大前 正臣（訳）（1975）．人は城，人は石垣――日本人資質の再評価 ――　サイマル出版会）

Heine, S. J., Lehman, D. R., Peng, K., & Greenholtz, J. (2002). What’s wrong with cross-cultural comparisons of subjective Likert scales?: The reference-group effect. *Journal of Personality and Social Psychology*,

82, 903−918.
石田 英一郎（1969）．日本文化論　筑摩書房
（Ishida, E.）
Lukes, S. (1973). *Individualism*. Oxford: Basil Blackwell.
（ルークス，S. 田中 治男（訳）（1987）．個人主義の諸類型　平凡社）
Maraini, F. (1957). *Ore Giapponesi.* Bari: Leonardo da Vinci. New edition (2000). Milano: Corbaccio.
（マライーニ，F. 岡田 温司（監訳）（2009）．随筆日本――イタリア人の見た昭和の日本――　松籟社）
Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, **98**, 224−253.
真島 理恵・山岸 俊男・Michael Macy（2004）．信頼と協力に関する日米行動比較――繰り返しのある実験ゲームにおける内集団選好と信頼行動の日米比較――　心理学研究，**75**, 308−315.
（Mashima, R., Yamagishi, T., & Macy, M. (2004). Trust and cooperation: A comparison of ingroup preference and trust behavior between American and Japanese students. *Japanese Journal of Psychology*, **75**, 308−315.）
松田 毅一（1973）．緒言　松田 毅一・佐久間 正・近松 洋男（訳）日本巡察記　平凡社　pp. i−viii.
（Matsuda, K.）
Mouer, R. E., & Sugimoto, Y. (1986). *Images of Japanese society: A study in the social construction of reality*. London: Routledge & Kegan Paul.
中根 千枝（1964）．日本的社会構造の発見――単一社会の理論――　中央公論 5 月号　pp. 48−85.
（Nakane, C.）
中根 千枝（1967）．タテ社会の人間関係――単一社会の理論――　講談社
Nakane, C. (1970). *Japanese society*. Berkeley, CA: University of California Press.
Said, E. W. (1978). *Orientalism*. New York: Georges Borchardt.
（サイード，E. W. 今沢 紀子（訳）（1986）．オリエンタリズム　平凡社）
Schooler, C. (1990). The individual in Japanese history: Parallels to and divergences from the European experience. *Sociological Forum*, **5**, 569−594.
杉本 良夫・マオア，ロス（1982）．日本人は“日本的”か　東洋経済新報社
（Sugimoto, Y., & Mouer, R.）
高野 陽太郎（2008）．“集団主義”という錯覚――日本人論の思い違いとその由来――　新曜社
（Takano, Y.）
Takano, Y. (2013). Japanese culture explored through experimental design. In A. Kurylo (Ed.), *Inter/cultural communication*. Thousand Oaks, CA: Sage. pp. 405−412.
高野 陽太郎・纓坂 英子（1997）．“日本人の集団主義”と“アメリカ人の個人主義”――通説の再検討――　心理学研究，**68**, 312−327.
（Takano, Y., & Osaka, E. (1997). “Japanese collectivism” and “American individualism”: Reexamining the dominant view. *Japanese Journal of Psychology*, **68**, 312−327.）
Takano, Y., & Osaka, E. (1999). An unsupported common view: Comparing Japan and the U.S. on individualism/collectivism. *Asian Journal of Social Psychology*, **2**, 311−341.
Takano, Y., & Sogon, S. (2008). Are Japanese more collectivistic than Americans?: Examining conformity in ingroups and the reference-group effect. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, **39**, 237−250.
Triandis, H. C., Bontempo, R., Villareal, M., Asai, M., & Lucca, N. (1988). Individualism-collectivism: Cross-cultural perspectives on self-in-group relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **54**, 323−338.
Valingano, A. (1583). *Sumario de las cosas de Japón*.
（ヴァリニャーノ，A. 日本要録　松田 毅一・佐久間 正（編訳）（1965）．日本巡察記　桃源社　pp. 179−300）／（ヴァリニャーノ，A. 佐久間 正（訳）日本諸事要録　松田 毅一・佐久間 正・近松 洋男（訳）（1973）．日本巡察記　平凡社　pp. 3−156.）
Valignano, A. (1592). *Adiciones del Sumario de Japón*.
（ヴァリニャーノ，A. 近松 洋男（訳）日本諸事要録補遺　松田 毅一・佐久間 正・近松 洋男（訳）（1973）．日本巡察記　平凡社　pp. 159−234.）
Vogel, E. F. (1979). *Japan as number one: Lessons for America*. Cambridge: Harvard University Press.
（ヴォーゲル，E. F. 広中 和歌子・大本 彰子（訳）（1979）．ジャパンアズナンバーワン　TBS ブリタニカ）
Volpi, V. (2004). *Il visitatore: Alessandro Valignano, un grande maestro italiano in Asia*. Casale Monferrato: Piemme.
（ヴォルピ，V. 原田 和夫（訳）（2008）．巡察師ヴァリニャーノと日本　一藝社）

―― 2015. 2. 2 受稿，2015. 7. 11 受理 ――